

# 『大阿弥陀經』 訳注（七）

辛 嶋 静 志

はじめに

今回訳出したのは、『大阿弥陀經』下巻，大正蔵第12巻，311b13-312a2の部分である。いわゆる「三毒・五惡段」の導入部分にあたる。極めて難解な漢文であり，六七割ほどしか理解できなかったというのが実感である。

内容をかいつまんで紹介すると，先ず，阿弥陀仏国に往生した者たちは，七宝で出来た池にみな集まって，それぞれ蓮華の上に坐って，自分たちが前世で行った善行や聞いた教えなどについて語るといふ。中には善行などしたこともない者もいるが，そういう者は，ひとり隅で小さくなって，善行をしなかったことを後悔するが，もはや手遅れ。一方，阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢は，覚りへの高い願いと慈悲を懷き，考えも行いも清く正しく，心が安らかで欲がない。阿弥陀仏国は，五光・九色の光を放ち，さらにそれらが交じり合って輝いていて，この上なくすばらしい。その仏国土へ往けば限らない寿命と楽しみを得られ，しかもそこへは行き易い。どうして仏道を求め，その仏国土に生まれることを願わないのか。どうして人々は俗事に執着して，無常を憂うばかりなのか，と述べ，「三毒・五惡段」に続く。

底本には高麗蔵所収本を用いた。本訳註の原稿に目を通して，誤りを指摘して下さい。佐藤直子さん（東洋大学大学院修了）と佐々木大悟氏（龍谷大学研究生）に深く感謝致します。

和訳

（大正蔵第12巻，311b13-312a2）

（往生者たちが自らを語る）

1) 仏は阿逸菩薩に仰った。

「八方上下の無数の（仏国の）神々や人々や比丘たち<sup>2)</sup>、比丘尼、優婆塞、優婆夷が阿弥陀仏国に生まれる。多くの者たちが、みな<sup>3)</sup>七宝のできた池に大いに集まる<sup>4)</sup>。みな<sup>5)</sup>それぞれ<sup>6)</sup>大蓮華の上に坐り、みな<sup>7)</sup>自分の行った道徳や善業について語る。人々は、それぞれ前世、過去世に<sup>8)</sup>さとりを求めている時、守った戒、行った善法、往生に至った経緯、好んだ<sup>9)</sup>（仏の）教え<sup>10)</sup>、知っている教えの智慧、行った功德を語る。上から下まで順番に一通りみな（語る）と、教えに対する理解の程度、智慧の深淺、徳の優劣の違いが分かり、自ずと才能・智慧・勇ましき<sup>11)</sup>をランク付けできる（？）<sup>12)</sup>。（生まれた人たちが？）みな互いにじっと見合い<sup>13)</sup>、礼儀を守り、（しかも）和やかで<sup>14)</sup>、みな飛び上がるほど喜ぶ。智慧のある者、あるいは<sup>15)</sup>勇敢な者、それぞれ程度が異なる（？）<sup>16)</sup>。」

- 1) 『平等覺經』にのみ対応文がある (293b2f.)。香川 1984: 303を参照。
- 2) 比丘僧 *Skt. bhikṣu-saṅgha*の音写。Krsh (2001) .18を参照。
- 3) 皆共 訳注(四)注(38)を参照。
- 4) 衆等大會皆共於七寶浴水中 文の構造がおかしい。『平等覺經』には「(其往生無量清淨佛國)衆等大會、皆共於七寶浴池中」(293b4)とある。
- 5) 都共人人 「都共」は類義字を重ねた表現。
- 6) 悉自 「自」は二音節にするために加えられた接尾辞。訳注(一)注(13)、(30)を参照。
- 7) 皆悉 訳注(四)注(32)を参照。
- 8) 前世宿命 訳注(二)注(4)を参照。
- 9) 好意 類義語を重ねた語。六朝代の文献から見える。Krsh (1998) .175を参照。
- 10) 經道 訳注(一)注(4)、(19)を参照。
- 11) 才健勇猛 「才健」は辞書にない表現。訳注(二)注(69)「才猛」も参照。
- 12) 自然之道別知才能、智慧、健猛 難解。「自然之道」を「自ずと」と訳したが、検討を要する。「別知」は「区別する」の意味か。訳注(五)注(68)を参照。「健猛」は辞書にない表現。「健」も「勇敢」の意味(HD.1.1520a[3], GH.139a[2]-[5])。本經に出る「才健勇猛」(訳注[五]注[35])、「明健」(訳注[六]注[69])の「健」も「勇敢」の意味。逆にした「猛健」という表現は同じ支婁迦識訳『道行般若經』(大正8巻, 458c1)に見える。
- 13) 衆相觀照 難解。「觀照」(cf. HD.10.364a)はおそらく同義字を重ねた表現。「照」にも「見る、知る」の意味がある(HD.7.203b[5], GH.1368a[4], [5])。
- 14) 禮義和順 「禮」は「人が実践すべき作法」, 「義」は「礼に適った正しい行い」あるいは「正しい軌範」の意味であろう。「禮義」(cf. HD.7.963b)も「和順」(cf. HD.3.273b)も古典から見える表現。本經の別の箇所「皆相敬愛、無相嫉憎者、皆以長幼上下、先後言之、以義如禮」(303c18), 「禮義都合、通洞無違、和順副稱」(311c16), 「無義無禮、自用識當、不可諫曉」(315a3), 「如父如子、如兄如弟、莫不仁賢、和順禮節、都無違諍」(316b5f.)とあるのを参照。
- 15) 有 ここでも「或」の意味か。訳注(一)注(63)を参照。
- 16) 各不相屬逮 難解。「屬逮」は「及ぶ」という意味の同義の字を重ねた表現。「屬」に「及ぶ、至る」の意味があることは、GH.628c (35) - (41)を見よ。「及ぶ」の意味の「屬逮」の用例には、竺法護譯『光讚經』「菩薩智慧……過一切聲聞、辟支佛智慧、百倍、千倍、巨億萬倍、不相屬逮」(大正8巻, 152c2)がある。竺曇無蘭訳『泥犁經』「雖在是中作子、或時跛蹇聾盲不屬逮人」(大正1巻, 909a28), 失訳『放鉢經』「若生弊惡人中…」

（劣った往生者）

仏は仰った。

「人が前もって功德善行をなしたことが全くなく、（功德善行をなす）ことを馬鹿にし<sup>17)</sup>、信じず<sup>18)</sup>、かえってぶらぶらし<sup>19)</sup>、なまけていたら、いいはずがあろうか<sup>20)</sup>。（阿弥陀仏国に）至った時、みんな集まり、教えを語りあい、（その人も）当然促されるが<sup>21)</sup>、応答がしどろもどろ<sup>22)</sup>。さとりへの智慧<sup>23)</sup> に関して傑出し群を抜き<sup>24)</sup>、優れた才能をもつ者<sup>25)</sup> が（いる中で）（?）、（その人は）ひとり隅で小さくなり<sup>26)</sup>、その場になって後悔する。後悔しても、すでに（阿弥陀仏国に）至っているのだから、いまさうどうしようもない<sup>27)</sup>。ただ心の中はひねくれ荒くれ<sup>28)</sup>、（他の人たちと）同

、形瘡盲聾不屬逮人」（大正15巻、450b7）はやや異なる意味か。この部分、本經下巻の冒頭の「其世間人民、若善男子・善女人願欲往生阿彌陀佛國者有三輩、作德有大小、轉不相及」（「世間の人々、あるいは善男子・善女人で、阿弥陀仏の国に生まれたいと願う者は、三種に分かれ、行う徳が大から小まで異なるのである。」）という表現を参考。

- 17) 輕戲 類義語を重ねた熟語。古訳仏典から見える表現（cf. Krsh[1998]. 335）。『平等覚經』の「輕虧」（293b13）は誤り。
- 18) 輕戲不信之 本經に「輕戲不信使」とあるのを『平等覚經』の読みにより改める。
- 19) 徒倚 本經に「徒倚」とあるのを『平等覚經』の読みにより改める。「徒倚」（xīyǐ）は同じ韻字を重ねた疊韻語。「うろうろする、ぶらぶらする」の意味で古典から見える（HD.3.986b参照）。本經でも、後に「其五惡者、世人徒（←徒）倚懈惰、不肯作善、不念治生」（314c23）という類似の表現が出る。また、竺法護訳『仏昇利天為母說法經』に「其土人民……多爲徒倚、懈怠、慢突」（大正17巻、797c24）という似た表現がある。
- 20) 爲用可爾 難解。「爲」は「一体……か」という疑問（ここでは反語）を表す（Cf. Krsh[1998].458）。「可」は「よい」という意味であろう。
- 21) 自然迫促 「迫促」は同義字を重ねた表現。「迫る。催促する」の意味。辞書（HD.10.763a）には『漢書』などの例が採られている。
- 22) 遲晚 類義字を重ねた表現。仏典から見える。HD.10.1235aは『敦煌變文集』からの例を採っている。
- 23) 道智 訳注（一）注（23）、訳注（五）注（12）を参照。
- 24) 卓殊超絶 「卓殊」（cf. HD.1.850b）も「超絶」（cf. HD.9.1128b）も類義字を重ねた表現。古典から見える表現。
- 25) 才能高猛 『平等覚經』には「才妙高猛」（293b15）とある。「高猛」は辞書類に採られていない。「優れた」の意味か。訳注（二）注（69）で「才猛」を「才能と勇気がある」と考えたが、「才能が優れている」の意味かも知れない。
- 26) 羸 本来は「やつれる、弱っている」の意味。
- 27) 臨事乃悔。悔者、已至（←出）、其後當復何益？ 難解。原文の「已出」（『平等覚經』も同じ）を「已至」の誤りと見た。本經の別の箇所「臨時不計、事至、乃悔」（314a24）、「當是之時、悔復何益？當復何及？」（314c14）、「大命將至。至時、皆悔。其後乃悔、當復何及？不豫計作善、臨窮何益？」（315a20）という表現を参照。「當復」は「いったい」という疑問・反語を強める表現（cf. Krsh[1998]. 80）。この「復」は二音節にするために加えられた接尾辞でそれ自体は意味がない。
- 28) 悵悵（←悵） 高麗藏・金藏には「悵悵（liáng）」とあるが、「悵悵（hèn）」の誤り。宋版には「戾悵（hèn）」とある。これら表現は辞書に採られていないが、「戾悵

等になりたいと願うばかり<sup>29)</sup>。」

(阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢たちの優れた徳)

<sup>30)</sup> 仏は仰った。

「阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢たちが大集会をするのに、みな自ずと集まる。(彼らは) ところを制しており、行いもきちんとしており<sup>31)</sup>、自由自在に遊び楽しみ、みな連れだって飛んできて、大挙して<sup>32)</sup> 出入りし、(互いに?) 最高に供養し、喜び楽しむ。みな一緒に教えを観想し(?), 仏道を行い<sup>33)</sup>、仲睦まじく、ずっと親しくしていて(?)<sup>34)</sup>、才能が優れ<sup>35)</sup>、智慧あり、空のように虚心で<sup>36)</sup> (ひたすら) 精進して願 (の成就) をめざし、途中で志を翻す<sup>37)</sup> ことは決してなく、意志が揺らぐことは決してなく、疲れることを全く知らない<sup>38)</sup>。その時、さとりを求めているとはいえ<sup>39)</sup>、外見は

、(hěn)」、「戾狠(hěn)」(HD.7.348a)、あるいはひっくり返した「恨悞」(HD.7.529b)、「悞戾」(HD.1.1357a)、「悞悞」(HD.3.956a)、「狠戾」(HD.5.51a)と同じく、「凶惡でひねくれている」の意味。『平等覺經』には悞悞(293b17)とあり、『一切經音義』は「戾亮」(大正54巻, 405a14)と引いているがいずれも誤り。訳注(三)注(50)「抵悞」も参照。王日休校輯『大阿弥陀經』には「自然促迫其心慚悔, 悔亦無及, 但慊悵發憤, 慕及等夷」(337c25)とある。

<sup>29)</sup> 慕及等爾 宋版などは「慕及等耳」(『平等覺經』も同じ)。「慕及」は訳注(六)注(124)を参照。王日休校輯『大阿弥陀經』には「慕及等夷」(337c25)とある。

<sup>30)</sup> 『平等覺經』にのみ対応文がある(293b18f)。香川 1984: 305を参照。

<sup>31)</sup> 拘心制意, 端身正行 「拘心」と「制意」、また「端身」(cf. HD.8.397b)と「正行」とは、それぞれ同義。

<sup>32)</sup> 翻輩 訳注(四)注(13)で述べたように、「翻輩」は「𪛗輩」(bān béi)の訛で、「群をなして」「大挙して」「大勢で」の意味で使われていると考えられる。訳注(六)注(12)、(15)も参照。

<sup>33)</sup> 觀經行道 「觀經」(『平等覺經』も同じ)は難解。「說經, 行道」という表現はしばしば出る。訳注(一)注(85)参照。

<sup>34)</sup> 和好久習 「和好」は古典から見える表現(HD.3.268aには『管子』の用例が採られている)。「久習」(HD.1.634a「ずっと習熟している」)は、ここでは「ずっと親しくしている」の意味か。『平等覺經』の「文習」は誤り。

<sup>35)</sup> 才猛 訳注(二)注(69)で「才猛」を「才能と勇気がある」と考えたが、「才能が優れている」の意味か。注(25)参照。

<sup>36)</sup> 志若虛空 この表現は他の仏典にも見える。康僧会訳『六度集經』「昔有兩菩薩, 志清行淨, 内寂無欲, …… 清淨無爲, 志若虛空, 四禪備悉, 得五通智」(大正3巻, 43c22f.); 竺法護訳『弘道広頭三昧經』「身淨無垢, 暉曜明徹。志若虛空, 無數諸劫意不倦者, 逮獲總持」(大正15巻, 488c22f.)。

<sup>37)</sup> 迴 底本の「徊」を宋版などや『平等覺經』により改める。

<sup>38)</sup> 懈極 「懈」と「極」は類義語。「懈」は「たるむ」から「だるい, 疲れている」の意味にもなる(HD.7.763b[2]; GH.832c「懈, 疲也」「懈者, 極也」)。「極」も「疲れる」の意味で使われる(HD.4.1135a[14]; 訳注[三]注[43]「困極」; 訳注[五]注[29]「無厭無極」)

ゆったりとしている<sup>40)</sup>。内心は逆にじりじりしている<sup>41)</sup>。虚空（のように）悠然として（？）<sup>42)</sup>、ちょうどほどよく<sup>43)</sup>、外見と心の中が呼応している<sup>44)</sup>。そのままで（外見は）きちんとしていて<sup>45)</sup>、きりりと引き締まっていて<sup>46)</sup>、端正。身も心も清らかで、欲望がなく、好き嫌いがなく<sup>47)</sup>、あらゆる悪も穢れもない。彼らの願いはみな<sup>48)</sup> ゆるがず、すばらしく<sup>49)</sup>、ふくらんだりしぼんだりせず、さとりを求めて、穏和でまっすぐ<sup>50)</sup>、誤ったり歪んだりしない<sup>51)</sup>。さとりにへの法<sup>52)</sup> を目指して<sup>53)</sup>、教えや決まりに従

、を参照。「懈極」は「疲れる」の意味で、後の漢訳仏典でも使われる。例えば、鳩摩羅什訳『禅法要解』『行人如小懈極，心暫止息』（大正15巻，291c12），善無畏訳『大毘盧遮那成佛神變加持經』にも「緣念成悉地 普利衆生心 方迺作持誦 懈極然後已」（大正18巻，52a12f.）。

- 39) 時雖求道，外若遲緩 「雖」はもっと後まで掛かるのかも知れない。
- 40) 遲緩 同義語を重ねた表現。HD.10.1237bには『後漢書』などの用例が採られている。
- 41) 内獨急疾 この「獨」は「逆に、かえって」の意味。GHX.108には『左伝』『漢書』などの用例が挙げられている。あるいは、「とても、非常に」の意味（訳注〔六〕注〔88〕を参照）かも知れない。「急疾」は同義語を重ねた表現。HD.7.459aには『呂氏春秋』などの用例が挙げられている。
- 42) 容容虚空 『平等覺經』は「容容虚空中」にする。難解。「容容」は「悠然、ゆったり」の意味か。辞書類にはこの意味の用例は採られていない（cf. HD.3.1493a）。あるいは同音の「溶溶」と同じく「ひろびろ」の意味かも知れない。例えば『楚辭・劉向「九嘆・愍命」』に「心溶溶其不可量兮，情澹澹其若淵」とある（cf. HD.6.40a）。
- 43) 適得其中 訳注（三）注（102）参照。
- 44) 中表相應 「中表」は前に「外若遲緩。内獨急疾」とあった「内」と「外」を言い換えた表現。この意味の用例は辞書類にない（cf. HD.1.592a）。
- 45) 自然嚴整 「嚴整」は同義語を重ねた表現。辞書には晋代『後漢紀』などの例が採られている。HD.3.551b, Krsh (1998) .523を参照。
- 46) 撿歛 辞書類には採られていない表現。「撿」（あるいは同音同義の「檢」「儉」）と「歛」は類義。ここでは「引き締まった」という意味であろう。
- 47) 適莫（←貪） 「適莫」は「好むことと憎むこと」あるいは「人に対して親切であったり不親切であること」。ここの底本・諸本・『平等覺經』には「適貪」とあるが、誤り。本經の他の箇所「適莫」とあるところを、『平等覺經』はやはり「適貪」と誤写している。訳注（一）注（108），訳注（六）注（32）を参照。
- 48) 皆各 漢訳仏典から見える表現。訳注（三）注（22）を参照。
- 49) 殊好 大正蔵は「殊好」と誤る。「殊好」は類義語を重ねた表現。Krsh (1998) .417, Krsh (2001) .249, 422を参照。
- 50) 和正 HD.3.266aに『太玄經』の例が挙げられている。
- 51) 不誤傾邪 「傾邪」は同義語を重ねた表現。HD.1.1644bに『漢書』などの例が挙げられている。
- 52) 道法 Krsh (1998) .88; Krsh (2001) .62を参照。支婁迦讖訳『道行般若經』にも「其人不知尊摩訶般若波羅蜜者，……復教學餘經，若阿羅漢，辟支佛道法」（大正8巻，427b4），「有學般若波羅蜜者，亦知俗法，復知道法」（447a11）などとする。
- 53) 准望 「准望」に同じ。「准」「準」「望」は「向かい合う」あるいは「目指す」という同義字。GH.1303b (24)「準，望」とあり，LXZZ.528a「准，希也」とあるのを参照。また訳注（三）注（85）も参照。「准望」（＝「準望」）はここでは「目指す，望む」

い<sup>54)</sup>、それらに違い踏み外すようなことはしない<sup>55)</sup>。<sup>56)</sup> あたかも法律に従うように。

(彼らは) 八方上下のはてしない所まで<sup>57)</sup> さまよい、<sup>58)</sup> 行きたいところは思いのままに、果てしなく極まりなく<sup>59)</sup> 行き着く。(彼らは) みな<sup>60)</sup> 仏道を実践し、ひろびろとした領域で(さとり)に達したいと思い、はるかに広がる領域で道(さとり)を念じ<sup>61)</sup>、他に思いはなく、憂いもない。あるがままで人為を働かさず<sup>62)</sup>、(一切は)虚無にして空(という達観)に身を置き<sup>63)</sup>、心が安らかで欲がない<sup>64)</sup>。立派な願いを立

ゝの意味であろう。DWYC.424 = DBJ. 1182 (68) は『敦煌変文』から「望む」の意味の「準望」を用例を採っている。智顗『妙法蓮華經玄義』「第一阿僧祇劫、常離女人身、亦不自知當作佛、不作佛、準望二乘位」(大正33巻、729b26)の「準望」も同じ意味。

- 54) 隨經約令 この「約」は「依拠する。従う」の意味。GH.1712aには「約、依也」「約、依約也」「準依其事曰約」などの解釈が引かれている。
- 55) 不敢違蹉跌 底本・金藏・房山石經本以外には「不敢蹉跌」とあり、『平等覺經』には「不敢違失蹉跌」とある。
- 56) 若於繩墨。遊於八方上下無有邊幅 本經には「繩墨。遊於」がない。『平等覺經』から補う。「繩墨」は「墨繩、墨糸」の意味から、「法律」の意味になる(HD.9.1031bを参照)。
- 57) 無有邊幅 「邊幅」は類義字を重ねた表現で「はて」の意味。HD.10.1295aは清代の用例を挙げている。支婁迦讖訳『道行般若經』にも幾つかの用例がある。例えば、「般若波羅蜜者、難得見邊幅」(大正8巻、444c27)、「是經不可得邊幅、不可得極。是經中、我悉知已。皆空耳」(455b10)など。「幅」が「はて」の意味になることは、GH.674d(7)に引く「幅、猶邊際也」(『玄奘音義』;大正54巻、361c10)などを参照。
- 58) 自在所欲至到 本經の「若欲使是兩菩薩到八方上下無央數諸佛所、即便飛行、隨心所欲至到」(308b13f.)を参照。「自在所欲」はすでに見た「在所欲〜」(訳注[五], 注[5], 訳注[六], 注[17]参照)、「在所〜」(訳注[五], 注[5], 訳注[六], 注[103]参照)、「隨心所欲〜」(訳注[五], 注[77]参照)、「隨意所〜」(訳注[三], 注[96]参照)、「在在所欲」(訳注[四], 注[21]参照)と同じく、「自在に〜する」の意味。
- 59) 無窮無極 道家の文献では「無窮」も「無極」も“道”の極まりなきさまを表す。例えば、『老子』第二十八章「爲天下式、常德不忒、復歸於無極」、『莊子』在宥篇「入無窮之門、以遊無極之野」。こもそれを意識しているかも知れない。
- 60) 咸然 「みな。すべて」の意味。辞書類には採られていない。
- 61) 恢廓慕及、曠蕩念道 本經の底本・金藏・宋版には「恢廓及曠蕩」とあるが、元・明版及び『平等覺經』(293c1)により改める。「恢廓」と「曠蕩」、「慕及」と「念道」がそれぞれ対になっている様だ。「恢廓」(cf. HD.7.514a[漢代の用例を挙げる])と「曠蕩」(同じ韻字を重ねた量韻語。Cf. HD.5.846b[漢代の用例を挙げる])は、「ひろびろ」という意味の類義語。重ねて使われた例もある。例えば、『無量壽經』「其佛國土……恢廓曠蕩、不可限極」(大正12巻、270a7f.)、北涼代失訳『金剛三昧經』「爾時、大衆聞說是義、心大欣懌、得離我心、入空無相、恢廓曠蕩。皆得決定、斷結盡漏」(大正9巻、367b18f.)。「慕及」は訳注(六)注(124)を参照。
- 62) 自然無爲 「自然」は「人為によらず、自ずからかくある」という意味。訳注(一)注(12)を参照。「無爲」は、人為を働かすことをやめることを指し、道家の理想の境地。訳注(五)注(58)を参照。本經の別の箇所にも、「阿彌陀佛國……自然之無爲、最快、明好、甚樂之無極」(308a10f.)、「阿彌陀佛國皆積德衆善、無爲自然、在所求索」(315c18f.)という類似の表現がある。

てたら<sup>65)</sup>、懸命に（成就しようと）求める。哀れみ・慈しみを懷いて<sup>66)</sup>、精進する<sup>67)</sup>。考えと行動が、作法（礼）と正しい軌範（義）に合致し<sup>68)</sup>、一貫してもとることなく<sup>69)</sup>、穏やかで<sup>70)</sup>、（礼と義に？）合致して<sup>71)</sup>、（礼と義が？）言うこととなすことの<sup>72)</sup> すべてに及んでいる（？）<sup>73)</sup>。（輪廻を）越えて解脱し<sup>74)</sup>、さらに進んで涅槃に入り、明るさという点において覚りそのものと永久に等しくなり<sup>75)</sup>、あるがままに（その覚りそのもの）を保ち続ける<sup>76)</sup> ことができる<sup>77)</sup>。<sup>78)</sup> 思いのままに、嬉々として、

- 
- 63) 虚無空立 「虚無」は訳注（三）注（39）を参照。本經の宋版などには「虚空無立」とある。
- 64) 憺安無欲 本經には「憺安無欲」とあり、『平等覺經』には「淡安無欲」（293c2）とあるが、おそらく「憺」は「淡」の誤り。「憺」（＝「淡」）は「安」と類義。GH.805aに引く『類編』「憺，安也」を参照。
- 65) 作得善願 「作得」は、本經の「即選擇心中所願，便結得是二十四願經」（301a13）の「結得」と同じく、動詞のすぐあとに「得」が置かれた形。訳注（一）注（32）を参照。
- 66) 含哀慈愍 「哀」「慈」「愍」は類義語。「含哀」は「哀痛の情を懷く」の意味で漢代の文獻などに見える（HD.3.227a参照）。
- 67) 含哀慈愍，精進 慈悲と精進を組み合わせた「慈心精進」（慈しみをもって精進する）という、本經に頻出する表現（308a27, 28, 309c-1, 310a20, 310c13）を参照。
- 68) 禮義都合 「禮義」は注（14）を参照。
- 69) 通洞無違 「通洞」は同義字を重ねた表現。HD.10.932aには「通曉している」の意味で『文子』・『淮南子』の用例が引かれている。ここでは「一貫している」の意味か。なお宋版などには「洞通」とある。
- 70) 和順 注（14）を参照。
- 71) 副稱 同義字を重ねた表現。「一致する。合致する」の意味。辞書には採られていないが、『論衡』超奇篇「實誠在胸臆，文墨著竹帛，外内表裏，自相副稱。意奮而筆縱，故文見而實露也」、『潜夫論』相列篇「頭面手足，身形骨節，皆欲相副稱」などが出る。
- 72) 表裏 本經の「表裏相應，言行忠信」（313b8）を参照。
- 73) 苞（←褒）羅 本經には「褒羅」とあるが、『平等覺經』（293c4）の読みにより、「苞羅」と改める。「苞羅」（cf. HD.9.355b. 晋代『後漢紀』などの例）は「包羅」（cf. HD.2.187b. 漢代の用例）と同じく、「包括する。網羅する」の意味。「苞」と「褒」は同じ発音（bāo）。それで「褒羅」と書き誤ったのであろう。
- 74) 過度解脱 「過度」は訳注（一）注（36）を参照。
- 75) 長與道德合明 他の箇所「佛智慧道德合明」（309b26），「今世爲善，後世生阿彌陀佛國，快樂甚無極，長與道德合明，然善相保守」（313b12）という表現が出る。訳注（五）注（143）を参照。「道德」は、ここでは「さとの本質」「さとりそのもの」の意味であろう。訳注（二）注（70），訳注（五）注（143）を参照。
- 76) 自然相保守 難解。「今世爲善，後世生阿彌陀佛國，快樂甚無極，長與道德合明，然善相保守」（313b12）という類似の表現を参照。この「相」は、動詞の前に置いて、行為が相手に及ぶことを示す。あるいは目的語の替わりになると解釈することもできる（すなわち「保守之」というのに等しい）。「相」のこの用法については、HD.7.1135b（3）（『史記』などの例を挙げている）やGHX.646-647（『詩經』『漢書』などの例を挙げている）を参照。
- 77) 能 『平等覺經』には「敢」とある（293c4）。
- 78) 快意之滋滋，眞眞（←滋眞滋眞）之（←了）潔白 本經の「快意之滋滋 滋眞了潔白」を『平等覺經』の読みにより改める。「快意」は後で「各欲快意恣心自在」

偽りがなく、清純である。願いはこの上なく（高く）<sup>79)</sup>、清浄で、ゆるがず、静まっている<sup>80)</sup>。

### （輝く阿弥陀仏国）

（阿弥陀仏国の）<sup>81)</sup>心地よさは極まりなく、喩えようのないほど素晴らしい。光が勢いよく高く広く輝き照らし<sup>82)</sup>、自然のもつあるがままの姿をあまねく輝き照らす

（314a4）、「恣心快意」（314b16）という表現があるように、「恣心」と同じく、「思うがままに」あるいは「意になつて心地よい」の意味（cf. HD.7.438-439）。

「滋滋」は、同音の「孜孜」と同じく、とてもうれしいさま、内心喜ぶさまを示す。HD.5.1516a「滋滋」にはこの意味の用例はないが、HD.4.203a（6）「孜孜」には晋代陶淵明の詩などでの用例が挙げられている。また、近現代語の用例だが、「喜滋滋」（HD.3.405a）、「樂滋滋」（HD.4.1294a）、「喜孜孜」（HD.3.402b）、「樂孜孜」（HD.4.1288b）などがある。

「快意之滋滋」「眞眞之（←了）潔白」及び後に出る「清浄之安(定)静」「巍巍之燿照」、さらに前に出た「阿彌陀佛國……自然之無爲」（308a10f.）の「之」は、おそらく形容句を列挙し、「…にして…」という意味であろう。この用法の例として、HD.1.677b（8）（2）は『老子』「玄之又玄」などの例を引く。GH.38c（75）は『礼記』から「知遠之近，知風之自，知微之顯」の例を挙げる。また『角川・大字源』44d（11）は韓愈の詩から「仁之義」の例を引く。また、少し用法は異なるが、DWYC.404には敦煌変文の「十指纖長之綢緞，雙臂修直而綿覆」など「之」が「而」と同じ働きをもつ例が挙げられている。

「眞眞」は「偽りがなく，誠実だ」という意味か。辞書類（cf. HD.2.147a）にこの意味の用例は採られてない。

- 79) 志願無上 この前後は五字句になっているから、『平等覺經』の「志願高無上」（293c7）の読みを採用すべきか。
- 80) 清浄之安定静 難解。『平等覺經』は「清浄定安靜」（293c7）とする。いずれも「清浄之安靜」の誤りか。但し，上にも「其志願皆各安定殊好」（311c9）とあって、「志願」が「安定」と形容されている。「之」が「…にして…」の意味であろうことは，注（78）を見よ。
- 81) 樂之無有極，善好無有比 本經の「阿彌陀佛國……自然之無爲，最快，明好，甚樂之無極」（308a10f.）という表現を参照。「善好」は同義語を重ねた表現。HD.3.442aには『百喻經』での用例が挙げられている。
- 82) 巍巍之燿照 「巍巍」は普通は高いさま，崇高なさまを示すが（cf. HD.3.875b），ここでは光が勢いよく高く広く輝くさまを意味する。本經の「阿彌陀佛光明俠（M006206）好巍巍」（303a28）という表現を参照。「燿照」は同義字を重ねた表現。「之」が「…にして…」の意味であろうことは，注（78）を見よ。
- 83) {燿照}巨開達明徹自然中自然相 「燿照」は衍字であろう。『平等覺經』には「{照}巨（←一旦）開達明徹」（293c8）とある。「巨」は「すっかり，あまねく」の意味（HD.1.514b[3]；GH.65c[14][15]）。「開達」も「明徹」も「はっきりと知る」の意味で使われることが多い（cf. Krsh[1998].248, 293）。ここでは光が遠くまで到達することを意味しているのであろう。「明徹」のこの様な意味の用例には，例えば，「（ある神が）即以其夜，威神光光，明徹遠照，往詣世尊。」（竺法護訳『生經』，大正3巻，92c18），「一分光明遍照大千地獄，鐵圍山間，幽冥之處莫不明徹」（失訳『菩薩本行經』，大正3巻，117c18）など。
- 84) 自然（←然）之有根本 難解。『平等覺經』には「自然之有根本」（293c9）とある。すぐ後に出る「薔華之自然」（“最高の自然”；311c22），『平等覺經』「最勝之自然」（293c11）に対応していると思われる。「自然（←然）之有根本」の「之」の用法は検討を要



(?)<sup>83)</sup>。自然には根本があり(?)<sup>84)</sup>、(それが)自ずから五(色)の光になり<sup>85)</sup>、五(色)の光は九色になり、九色(の光)が交じり合って回転し、あまたに変化する<sup>86)</sup>。最高の自然の在り方から(?)<sup>87)</sup>、自ずと七宝ができ<sup>88)</sup>、(さらに)縦横に万物が造られ<sup>89)</sup>、(それらの)光が交じり合って、輝きを一齐に放つ。きれいで、この上なくすばらしい<sup>90)</sup>。

### (往生は易しい)

、する (cf. GHX.838f.)。

- 85) 自然成五光 「自然之有根本，自然成五光」が、すぐ後に出る「鬱單之自然，自然成七寶」(311c22)に対応していると思われる。
- 86) 數百千更變 「更變」は同義字を重ねた表現。HD.1.532bには唐代以降の用例が挙げられている。
- 87) 鬱單之自然 『平等覺經』には「最勝之自然」(293c11)とある。「鬱單」(MC. ?jwat tñ)はSkt. *uttara* (“最高の”)の古い音写。『平等覺經』は「最勝」と漢訳している。逆に「最勝」を「鬱單」と書き換えるとは考えにくい。従って、ここの文章は『大阿弥陀經』が元で、『平等覺經』はそれに手を入れたものと推定される。ただ、なぜ*uttara*の様な普通の形容詞を音写する必要があったのか疑問。あらゆる物が自由自在であり、その意味で「自然」な理想郷とされる「鬱(=鬱)單曰」「鬱(=鬱)單越」(Uttarakuru)と阿弥陀仏国との連想の意図したものか。
- 88) 自然成七寶 「鬱單之自然，自然成七寶」が上に出る「自然之有根本，自然成五光」に対応していると思われる。
- 89) 横攬成萬物 「横」は「縦横に、遍く」の意味か。GHX.227b(二)には「當堯之時，天下猶未平，洪水攪流，汎濫於天下」(『孟子・滕文公上』)、「體恭敬而心忠信，術禮義而情愛人；橫行天下，雖困四夷，人莫不貴」(『荀子・修身』)などの例が挙げられている。「攬成」は辞書に採られていない。「沙門瞿曇有十自在。一者命自在。二者心自在。三者物自在。……能知一切惟是一心。名“心自在”。於虛空中攬成珍寶。名“物自在”」(菩提流支訳『大薩遮尼乾子所說經』大正9巻，348a26f.)の「攬成」もこのことと同じ意味の様だが、具体的なイメージが湧かない。
- 90) 光精參明俱出，好甚殊無有極 本經の別の箇所「皆自相參，轉相入中，各自熾煌參明，極自軟好，甚殊無比」(303b23f.: “[七宝は]みな交じりあい，入りくみあい，それぞれがきらめいて，光を錯綜させ，とてもきれいで，この上なくすばらしい。”)という表現を参照。「光精」は同義字を重ねた表現で(「精」も「ひかり」の意味で，例えば「三精」とは日・月・星の意味)、「光；輝き」を意味する。「光精」は別の箇所にも出る：「今佛面光精數千百色，上下明好乃如是」(300a-5)。辞書にはこの意味では採られていない(cf. HD.2.232a)。なお，逆にした「精光」はやはり「輝き」の意味で本經の別の箇所に出る(訳注[五]，注[86]参照)。
- 91) 以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 305を参照。ここからいわゆる五悪段にかけて『無量壽經』にも対応部分がある(274b19f.)。その部分は，明らかに『大阿弥陀經』あるいは『平等覺經』(293c12f.)の焼き直しである。『無量壽經』の対応部分は森三樹三郎博士による優れた訳注(森訳：92f.)があるので，それを参照した。
- 92) 其國土甚<殊好>若此 本經には「其國土甚若此」とあるが，『平等覺經』の読み(293c13)により「殊好」を補う。『無量壽經』は「又其國土微妙安樂清淨若此」(274b19)。

91) その国土がこんなにもすばらしいのに<sup>92)</sup>、なぜ、努力して善行をなし、(仏) 道の本来そのまま (の理) が<sup>93)</sup>、四方上下の無限のかなたまであらわれ、行きわたっていること<sup>94)</sup>を念じ、<sup>95)</sup> 志を虚空の中に向けよう (?) としないのか? どうして皆精進し、努力し、求めようとししないのか<sup>96)</sup>? <sup>97)</sup> (この世を) はるかに超えて、阿弥陀仏国に往生し、五惡 (道) を越えることができる。惡道は自然に塞がれ、(仏) 道の極みまで昇りつめる。(その仏国土へは) 行き易いのに、誰も (往く) 人はいない。その (仏) 国へは拒むものとてなく<sup>98)</sup>、そのまま引き寄せられるのである<sup>99)</sup>。どうして俗事を捨て、仏道の恩恵を求めようとししないのか? <sup>100)</sup> (そうすれば) 最高に長生きし、寿命と楽しみは極まることがない<sup>101)</sup>。どうして俗事に執着して、がやがやと争い<sup>102)</sup>、皆で無常を憂うのか?」

- 
- 93) 道之自然 この表現は別の箇所にも出る: 「強者服弱, 轉相剋賊, 自相殺傷, 更相食噉。不知作善, 惡逆不道, 受其殃罰。道之自然當往趣向, 神明記識」(313c9f.) 「天地之間五道各明, 恢曠窈窕, 浩浩汗汗, 轉相承受善惡毒痛。身自當之, 無有代者。道之自然隨其所行」(315a22f.)。訳注 (一) 注 (23) も参照。
- 94) 著於無上下, 洞達無邊幅 対句になっている。
- 95) 捐志虚空中 この「捐」の意味は難解。『無量寿經』はこの表現を省いている。
- 96) 何不各精進, 努力自求索? 『無量寿經』は「宜各勤精進, 努力自求之」(274b21) に改めている。
- 97) 可得超絶去往生阿彌陀佛國, 横截於五惡。<惡>道自然閉塞, 升道之無極 宋版などの読みにより「惡」を補う。『平等覺經』には「可得超絶去, 往生無量清淨阿彌陀佛國, 横截於五道。惡道自閉塞, 昇道之無極」(293c15f.)、『無量寿經』には「必得超絶去, 往生安養國, 横截五惡趣 (v.l. 道)。惡趣 (v.l. 道) 自然閉, 昇道無窮極」(274b22f.) とある。「横截」は同義語を重ねた表現。HD.4.1252bには漢代の文献での用例が挙げられている。「無極」は注 (59) を参照。
- 98) 逆違 類義語を重ねた表現。「背く; 拒む」の意味。HD.10.831bには『晋書』の例が挙げられている。
- 99) 自然之隨牽 難解。「隨牽」は他に用例がない。「之」はここでも「…にして…」の意味 (注[78]参照) かも知れない。『無量寿經』は「自然之所牽」(274b24) に改めている。
- 100) 行求道德 「行求」はKrsh (1998) .508を参照。本經の高麗藏本・房山石經本と『平等覺經』にはこうあるが、本經の宋版などと『無量寿經』は「勤行求道德」(274b25) に改めている。この「道德」を、森訳: 94-95は「仏道のもたらす恵み」と解釈する。あるいは「さとりのはたらき」あるいは「さとりそのもの」の意味であろうか。注 (75) を参照。
- 101) 壽<樂>無有極 底本には「樂」がないが、房山石經本・宋版などにより補う (=『平等覺經』・『無量寿經』)。
- 102) 何爲著世事譏諷 この一文、『無量寿經』は省略している。「譏諷」は「がやがや; けんけんがくがく」の意味 (HD.11.410aには『莊子』などの例が引かれている)。『平等覺經』(293c19) の高麗藏本は「饒」、それ以外の諸本は「譏」とするが、『一切經音義』は『平等覺經』から「世事譏諷」(大正54巻, 405a19) と引いている。

## 略号表

注で使用了略号は次の通り：

Coblin = W. South Coblin, *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*, Hong Kong 1983 (The Chinese University Press) .

DBJ = *Dūnhuángbiànwén Jiàozhù* 敦煌變文校注, Huang Zheng 黄征 and Zhag Yongquan 張涌泉, 北京 1997 (中華書局) .

DWYC = *Dūnhuáng Wénxiàn Yǔyán Cídiǎn* 敦煌文獻語言詞典, ed. Jiang Lihong 蔣禮鴻, 杭州 1994 (杭州大学出版社) .

GH = *Gùxùn Huìzuǎn* 故訓匯纂, ed. Zong Fubang 宗福邦, Chen Shinao 陳世鐸, Xiao Haibo 蕭海波, 北京 2003 (商務印書館) .

GHX = *Gùdàihànyǔ Xūcí Cídiǎn* 『古代漢語虛詞詞典』中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室編, 北京1999 (商務印書館) .

HD = *Hànyǔ Dàcídiǎn* 『漢語大詞典』, 全13冊, 上海, 1986-1994 (漢語大詞典出版社) .

Krsh (1998) = *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 1998, The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I) .

Krsh (2001) = *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* 妙法蓮華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 2001, The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica IV) .

LXZZ = *Lùnhéng Xùngǔ Ziliào Zuǎnji* 論衡訓詁資料纂輯, 楊宝忠・馬金平撰, 保定 2002 (河北大学出版社) .π

MC = Middle Chinese (表記方法はCoblin 1983: 41に準拠する)

Skt = Sanskrit

藤田 1970 = 藤田宏達『原始浄土思想の研究』, 東京 1970 (岩波書店) .

香川 1984 = 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』, 京都 1984 (永田文昌堂) .

香川 1993 = 香川孝雄『浄土教の成立史的研究』, 東京 1993 (山喜房佛書林) .

森訳 = 山口益, 桜部建, 森三樹三郎訳『浄土三部經』(大乘仏典6), 東京 1981 (改訂版) (中央公論社) .

訳注(一) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注(一)』『佛教大学総合研究所紀要』第6号(1999), pp. 135-150.

訳注(二) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注(2)』『佛教大学総合研究所紀要』第7号(2000), pp. 95-104.

訳注(三) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注(三)』『佛教大学総合研究所紀要』第8号(2001), pp. 133-146.

訳注(四) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注(四)』『佛教大学総合研究所紀要』第10号(2003), pp. 27-34.

訳注(五) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注(五)』『佛教大学総合研究所紀要』第11号(2004), pp. 77-96.

訳注(六) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』訳注(六)』『佛教大学総合研究所紀要』第12号(2005), pp. 5-20.

(平成十七年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)による研究成果の一部)

英文タイトル：

An Annotated Japanese Translation of the Earliest Chinese Version of the Sukhāvātīvyūha  
(7)